学 位 論 文 要 旨

学位論文題目　　川端康成文学における異界の研究
―生と死・俗と聖をめぐって―

申請者氏名　　郭　春燕

本研究は、川端康成の初期掌編「骨拾ひ」「白い花」「人間の足音」、中期掌編「十七歳」と後期中編『眠れる美女』を中心に分析、考察し、川端康成文学における〈異界〉の本質をあらためて解明しようとしたものである。これらの作品に登場する主人公たちは、単にこの世、つまり現実だけに生きている人間ではない。もちろん現実世界に生きているのだが、他方では彼らはどこかで異界を背負っている。あるいはどこかで異界に生きている。〈現実界〉と〈異界〉がどのように関わりあっているかは作品によって違う。本研究では、作品に描かれた人物描写やストーリー展開について、テキストに忠実に丁寧に分析することを心がけた。各章の概要は以下の通りである。

第一章「川端康成「骨拾ひ」論― 黄泉国訪問譚としての構造― 」では、葬儀が「私」と祖父との訣別を促す契機として機能していることを検証した。その訣別は「私」の内面において展開されるというより、骨拾いから納骨へと至る一連の儀式自体にこそ、死者との訣別の論理が組み込まれていることを論じた。そして、生者と死者の訣別の構造とは、黄泉国訪問譚という神話の構造によって支えられたものであることを明らかにした。「私」は自らの感覚で〈生〉と〈死〉を同時に体験することによって、混沌とした〈異界〉と触れ合ったのである。

第二章「川端康成『白い花』論― 艶めかしい聖女像ー」では、従兄、医師や小説家といった男たちと恋愛を繰り広げる主人公の女性を、〈聖女〉という観点から見直した。従兄との擬似的な結婚を〈近親婚の物語〉として、そこに死というプロットが構造化されてくることを検証した。従兄の死は、いわば近親婚の禁忌に違犯したことの代償としてもたらされたものである。また、『古事記』軽太子と軽大郎女の物語を参照することで、主人公に軽大郎女と衣通郎女の二面の同居を指摘し、俗と聖が裏表の関係で存在する〈異界〉を見出した。

第三章「川端康成『人間の足音』論― 魂の片足を喪失する人間― 」では、主人公である彼が片足を失うという設定に着目し、そのような設定に込められた意味を巡って考察を展開した。足音の病気や人間の魂の病気を聞き分ける超越的能力は、彼を普通の人間の認識では及ばない〈異界〉へ連れて行く。主人公の変身を保証する特別な「露台」について、本稿では説経節『をぐり』の構造を参照し、それが「土車」と同じ役割を果たすことを検証した。また、作品の結末部における「魂の片足を失つたやうな顔」をしている彼に注目し、二本足で立って歩き出した瞬間に魂の病気を持ち始める人間存在について論じた。

第四章「川端康成『十七歳』論― 継承される生命― 」では、戦争との関係で論じられることの多かった「十七歳」という作品をめぐって、生命的存在としての主人公女性の自己認識に注目した。「薄い鉛筆」「薄い蟻」「着物」などを通して、彼女は生命のはかなさを認識する。そして、見舞いに来る母と妊娠中の姉との対話を通じて、彼女は死の側から生者の世界を俯瞰する視座に自分を置いている。その視座は、生を常

に死との関連の中で捉えようとする川端康成文学の基本構造に深く通じ合っている。妹は自分を死の世界に置き、生きている世界にいるもの、家族やこれから生まれる生命を、死後の世界から守ってあげようとする。まだ生きていながら死者の視座を獲得する点に「十七歳」の独特な構造があるといえる。

第五章「川端康成『眠れる美女』論— 異質の混和する異界— 」では、江口老人と眠れる美女の造形や本質を明らかにした。江口老人も眠れる美女も、生と死、俗と聖の二面性をあわせ持った存在である。彼等が秘密の家で落ち合うという設定に、川端康成文学における〈異界〉と〈現実界〉の関係が凝縮され、設定されていることを検証した。そして、『眠れる美女』の源泉となった謡曲『江口』を媒介することで、黒い少女が二側面の中の俗と死に構造化され、死なざるを得なかった本質を究明した。『眠れる美女』は、日常的に生きている時間と空間の中に存在する〈異界〉を表現しているといえる。

以上、川端文学では、裏表の関係で〈現実界〉と〈異界〉が現れてくることがうかがえた。日常生活中に潜む〈異界〉という点に、川端康成文学の独特な魅力が読み取れる。

（様式９）

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 180 号	氏　名	郭　春燕
論文題目	川端康成文学における異界の研究―生と死・俗と聖をめぐって―		

（論文審査概要）

本論文は、日本近代文学を牽引してきた作家川端康成の作品の読解を試みたものである。研究対象となった作品は、短篇集『掌の小説』収録の「骨拾ひ」「白い花」「人間の足音」「十七歳」、及び『眠れる美女』の計五篇の小説である。これらの作品に登場する主人公たちは、いずれも現実の次元に収まる存在として描かれているわけではなく、何かしらのかたちで現実から逸脱する領域を抱え持っている。その現実から逸脱する領域を論者は〈異界〉と称し、そのような〈異界〉を措定することで開かれてくる新たな作品解釈の可能性について論じている。

本論文の構成は、序章、及び五つの章にわたって展開される本論部分、そしてそれらを総括する終章から成る。また、巻末には、各章毎の参考文献目録を収める。各章のタイトルは以下の通りである。

序章
第一章：川端康成「骨拾ひ」論―黄泉国訪問譚としての構造―
第二章：川端康成「白い花」論―艶めかしい聖女像―
第三章：川端康成「人間の足音」論―魂の片足を喪失する人間―
第四章：川端康成「十七歳」論―継承される生命―
第五章：川端康成『眠れる美女』論―異質の混和する異界―
終章
参考文献一覧

１．創造性

川端康成文学の異界について、従来の研究では、作中に描かれた物や状況が媒介となって現実とは異なる世界、すなわち異界が立ち現れてくるという見立てのもと、その異界の現象を促す媒介物に専ら注意が寄せられてきた。その媒介物とは、例えば、「香」（一柳廣孝の説）、「夢」（李聖傑の説）、「鏡」（馬場重行の説）、「茶屋／水」（橘正典の説）などを挙げることができる。こういった先行論に対し、論者は媒介物によることのない異界へのアプローチの可能性について提案する。論者の説く〈異界〉は現実世界と対峙する時空としてあるわけではなく、「〈現実界〉の背後に常に存在し、…現実の生の意味を人間に呼び掛けて来る世界」（134 頁）としてあるという。それはまた、「日常生活中にそのまま潜む」（135 頁）ものでもあるという。このような観点による〈異界〉が、果たして川端の作品中においてどのように析出されてくるかについて、本論文では各章毎に論を展開し、個別の〈異界〉像を提案している。その結果、第一章では主人公の「私」が生と死の領域を同時に体験すること、第二章では主人公の「彼女」が俗と聖の世界を体現していること、第三章では主人公の「彼」が同じ音を二つの異なる世界のものとして同時に聞き分けること、第四章では主人公の「妹」が生者と死者の両方の視点を獲得していること、第五章では主人公の「江口老人」が此岸と彼岸を同時に体験することを、それぞれ指摘し、そのような両義的な現象が作中に立ち現れてくることについて〈異界〉と規定する。これらの〈異界〉像は、各作品論の研究状況に新たな解釈を提案するものともなっているため、本論文の創造性は優れていると判断した。

２．論理性

本論文では、各章において〈異界〉なる状況や現象を析出するにあたって、作品に描かれた人物描写やストーリー展開をテキストに忠実に丁寧に分析するという方法を重視している。試みにそれを素描すると、第一章では、主人公である「私」の身体が〈生〉と〈死〉という二つの領域の中間地点でバランスをとっているアンビバレントな状態にあることを「鼻血」「心臓」「姿勢」といった身体描写

から読み取り、そこに〈生／死〉の未分化な状態が現象してくることを析出する。第二章では、主人公である「彼女」の身体に関して、「だんだん透き通つてくる白い肌」という描写が為されている点に着目し、そこに衣通郎女の系譜に連なる〈聖女〉の造形が見出されることを指摘する。第三章では、主人公である「彼」が片足を欠損した身体の持ち主として描かれている点に着目し、そこに、身体的欠損を聖痕（聖別されていることの表徴）と解して生きる〈聖なる者〉たちの存在様式が投影されていることを析出する。第四章では、主人公である「妹」が七歳の時に「薄い鉛筆」で「イヤデス」と書いたことと、十年後、十七歳となった「妹」が入院中に、鉛筆の芯を運ぶ「体の色が薄い蟻」を見つめていることを関連付け、そこに、生者の世界を俯瞰する視点が獲得されていく様相を析出する。第五章では、主人公である「江口老人」が繰り返し「六十七歳」という年齢にあると描かれている点に着目し、そこに、「性」が閉じられつつある一方で、まだ可能性の開かれた存在でもあるという両義的な在りようが読み取れてくることを析出する。

これらの状況や現象を析出していく試みは、各章において固有の〈異界〉像を具体化する結果をもたらしており、論証の手続きとして一定の成果を挙げていると判断されよう。よって、本論文の論理性は達成できていると判断した。

3．厳格性

本研究では、論を展開する前提として、序章において先行研究の状況が概観されている。本研究の問題意識の根幹部分を成す川端康成文学の〈異界〉に関する研究については、橘正典「『伊豆の踊子』の位相と構造」（『異域からの旅人—川端康成論』河出書房新社、1981 年 11 月）、高橋広満「〈異界〉論へのいざない」（東郷克美・高橋広満編『近代小説〈異界〉を読む』双文社出版、1999 年 3 月）、一柳廣孝「異界をまねく—川端康成『抒情歌』の〈香〉から」（『文学』第 5 巻・第 5 号、2004 年 9 月）、李聖傑「川端康成『山の音』における「魔界」思想の位相—戦争の影、戦後の世相、そして異界の構築—」（『解釈』第 58 巻・第 1-2 号、2012 年 2 月）等を通じてその動向が押さえられている。

また、各章の冒頭では、研究対象とした川端康成の作品に関連する先行研究の渉猟と整理に努めており、そういった手続きのもとに本研究の立場やプライオリティーを画定し、論を展開していくという姿勢が貫かれている。こういった点をもって、本研究の厳格性は優れていると判断した。

以上、審査委員 4 名の合議により、全体として「優れている」と判断し、論文審査結果を「合」とする。

論文審査結果
合・否

審査委員　（氏 名）森野正弘

（氏 名）柏木寧子

（氏 名）尾崎千佳

（氏 名）和田学